



かとう・けんいち

## 加藤 賢一さん

大阪市立科学館元館長

岡山理科大学元教授、理学博士

1951年、福島県生まれ。東北大学理学部天文学科卒業後、大阪市立電気科学館に技術職員として勤務。1989年、同館の閉館に伴い、大阪市立科学館へ異動し主任学芸員となる。その後、同学芸課長、館長、岡山理科大学教授などを歴任。専門は星の表面構造や元素量について研究する恒星分光学。現在は、恒星天文学、天文学史、天文教育、物理学史、科学系博物館、プラネタリウム等のいろいろを紹介する「星学館」を主宰している。

現代的なプラネタリウムが発明されて100年経った。プラネタリウムという用語自体は300年ほどの歴史があるようだから、100年はあくまで「現代的な」ものを指しているだけで、プラネタリウムへの期待は長く続いてきたと言って良い。では、いつ頃からかと言えば、古代ギリシアにさかのぼることができる。その証拠がああアンテキテラの器械で、惑星時計、天体位置計算機と見られているものである。このように、人類は少なくともここ2000年にわたって天体の動きを自分たちの手の中に収めようと努力してきたのである。

どうしてそんな努力をしてきたのだろうか？ それが経済合理性や冷静な判断に基づく行為だったとはとても思えない。そんな器械を作るくらいなら、武器や農機具の改良にでも務めた方が良かったはずである。なぜ、こうした、いわば無駄なことをしたのか？ 答えは簡単だ。それは、人間だから、である。つまり、人間はこの大きな自然のなかで育まれてきた存在であり、したがって自然の一部であり、自然と切り離すことができない存在だという認識がわれわれのDNAに組み込まれているからに他ならない。天と地、人間がつながっているという思いは人間が抱くまさに自然な思いであり、人間に共通の思いである。そして、人間はそれを形に表したいと思うようになり、アンテキテラの器械から現代のプラネタリウムまでつながって来たのだと思う。

自然との一体感から派生してきて形を成した哲学が占星術である。地球上の生き物の営みが太陽や月の運行に従っていることは誰の目にも明らかで、現に太陽に恵まれた地域とそうでない地域とでは人間の暮らしに大きな違いが生まれている。北方に住む人たちは太陽に恵まれた南方を目指して進み、輾転を生んできたのはその証拠である。このこと一つとって見ても、人間が自然から離れられない存在であることは明らかで、それをまとめた一大知識体系が占星術だった。現代の占星術が単なる遊びに墮してしまっているのは残念の極みで、本来の占星術は高邁な哲学であり、決してそんなちっぽけなものではなかった。

こうした占星術観を形あるものとして表したのがプラネタリウムという器械であり、空間だ、と筆者は思っている。それが2000年以上もの確かな歴史を重ねてきたのだから、そこには何がしかの普遍性があるに違いない。器械の形式が変わろうが、星像空間のしつらえが変わろうが、人間が存在している限りそのDNAはプラネタリウムのものを求める。それが普遍性というものだ。

今後、プラネタリウムがどのような歴史を歩んでいくのかわからないが、その歩みを進める先鋒にいるのがプラネタリアンの皆さんである。それは決して容易な道ではないだろうが、試行錯誤し、悩んでいった先に道ができる。そうせざるを得ないように人間はできているから、絶対、新しい道が見つかる。どんな世界が開けるか、筆者自身は目撃できそうにないのが残念だが、今よりも価値ある時間、空間を楽しめるようになるのは間違いない。期待している。

星学館（加藤賢一）

<https://seigakukan.sakura.ne.jp/>

